

# 南極OB会 会報

No. 27

発行 南極 OB 会  
会長 国分 征  
編集 広報委員会

## 今号の主な内容

- 新年のご挨拶 ○第 57 次観測隊壮行会開催 ○壮行会講演会「過去を学んで殻を破れ」  
○第 56 次越冬隊からのメッセージ
- 話題：「南極教育ネットワーク」にご支援を ○稚内市から、にかほ市から  
○南極関連情報 ○支部便り（青森、茨城、信州）
- 隊次報告（9、24、27、38 次） ○新刊紹介 ○会員の広場

## 新年のご挨拶

南極 OB 会会長 国分 征

南極観測 50 周年事業を契機に発足した南極 OB 会は、会員のみならず広く一般にも観測の意義の理解を求める目的で、会報の発行や講演会の開催、出版などの活動を行ってきた。また、白瀬南極探検 100 周年、南極観測再開 50 周年記念事業の企画・実施などにより活動の幅を広げてきた。南極観測体験者が語る形で歴史を記録に残そうとする試みとして立ち上げた南極歴史講話会は、20 回を数えた。

時代の変遷と共に一般的な南極観測への関心は薄れてきていることは否めない。例えば OB 会活動の一つである南極教室への応募数は、横ばいというより減少していると言った方がよい状況である。

OB 会が、隊次という横のつながりによる同窓会的性格の強い会としてではなく、今後の活動を続けていくために、講演会などのアウトリーチ活動をより充実させる必要がある



南極 OB 会事務室での国分会長

と考えられるが、これを支えるべき財政基盤が安定しているとは言い難い。現状では、通信費として負担していただいているものがほぼ唯一の収入源であり、これはほぼ横ばいという状況である。この点の打開、つまりは納入者の増加を図る具体策が求められている。

## <昭和基地から新年のメッセージ>

新年明けましておめでとうございます。南極 OB 会の皆さまには出発前の壮行会をはじめとして、これまで多くの暖かいご支援や励ましをいただき、誠にありがとうございます。昭和基地では、12 月 23 日に 57 次隊の第一便が到着し、南極の夏らしい、明るく賑やかな季節がまた巡ってきました。

56 次は記録的な積雪の多さもあって、つい一ヶ月前までの基地はまだ雪に覆われて真っ白でした。26 人という少ない越冬隊員での除雪・砂まき作業、受け入れ準備は困難を極めました。11 月末から休日なしで作業を続けることで、57 次隊が到着する前までに何とか受け入れできる状態まで整えることができま

した。

23日の第一便直後から開始した本格空輸に続き、1月4日に接岸した「しらせ」からの氷上輸送、貨油輸送も順調に進んでいます。この一ヶ月は、輸送、夏設営作業や引継ぎ作業が慌ただしく行われ、あっという間に越冬交代の日を迎えることと思います。

このあとの濃密な一ヶ月を両隊で無事乗り越えて、57次隊の夏期の活動が円滑に進み、

無事に57次の越冬生活がスタートできるように全力を注ぎたいと考えています。

OB会の皆さまにはこれまで同様のご支援、ご協力をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。皆さまにとって新しい年が素晴らしい年になることをお祈りしています。

第56次南極地域観測隊

越冬隊長 三浦英樹および越冬隊員一同

## 第57次南極観測隊壮行会開催

南極OB会主催の第57次南極観測隊の壮行会が2015年10月30日（金）、東京都千代田区一ツ橋のレストラン「アラスカ」パレスサイド店で開催された。観測隊37名を含む総勢77名が参加した。



第57次観測隊の皆さん

壮行会に先駆けて、観測隊の壮途に向けた餞（はなむけ）の講演があった。講師は5回の越冬隊員の経験を持つ石沢賢二氏で、演題は「過去を学んで殻を破れ— 失敗からの南極設営」であった。過去の失敗を分析して次の成功を導くという示唆に富んだ内容であった。続いて、南極OB会員に向けて、門倉昭観測隊長兼夏隊長（30次越冬）から第57次観測隊オペレーションの概要について説明があった。第57次観測隊は夏隊32名、越冬隊30名の62名であるが、その他、同行者18名が参加する。第57次隊の観測項目は第Ⅷ期計画の最終年として、大型の重点観測「南極域から探る地球温暖化」が各観測分野で実施される。夏期のオペレーションでは「しらせ」に大型ヘリコプター2機が搭載され、5年ぶりに2機体制による輸送が遂行されることと、昭和基地の観測・設営以外に、海鷹丸による海洋観測、ノルウェー隊のトロール基地周辺における地理・地質学的研究が行われること

が特色である。さらに、越冬隊員には5名の女性隊員が参加することもトピックスのひとつである。

同会場での壮行会では岡田雅樹氏（49次越冬）が司会進行を務めた。最初に國分征南極OB会会長による挨拶は、第57次隊は南極観測再開

50周年の年に出発され、かつ来年は南極観測60周年に当たるという記念すべき観測隊という祝いと励ましの言葉であった。続いて、平川崇氏（南極観測支援班長）による来賓の挨拶、竹内貞男氏（10次隊）による乾杯の発声でしばし歓談に入った。宴もたけなわ、稚内から駆けつけた北海道支部の高木知敬氏（21次）、茨城支部の馬場廣明氏（24次）か

## 57次日本南極地域



北海道支部 高木知敬氏

ら近況報告があった。三浦英樹第 56 次越冬隊長他越冬隊からの祝電メッセージの紹介があった。続いて、門倉昭観測隊長と樋口和生越冬隊長（50 次越冬）の呼びかけで、隊員一人ひとりの自己紹介があり、壮行会は最大に

盛り上がった。終わりに、國分会長より観測隊への記念品として「宗谷航海記」、「南極読本」「北極読本」の贈呈があり、壮行会は閉会した。

## 壮行会講演会 「過去を学んで殻を破れ」

### －失敗からの南極設営－

石沢賢二（国立極地研究所極地工学グループ）

#### 1. はじめに

私が初めて南極観測隊に参加したのは、第 19 次越冬隊でした。この時は、1 年を通してみずほ基地に滞在し、VLF 自然電波、地磁気などの超高層部門の他に自分の専門領域だった氷床ボーリング孔を利用した弾性波検層や氷震の観測などを行いました。その後、国立極地研究所の事業部観測協力室に採用になり、それ以来、設営の仕事を行ってきました。第 19 次隊で昭和基地からみずほ基地に行く途中、無人観測点の保守として風力発電機の復旧などを担当した影響で、再生可能エネルギーに興味を持ち、あすか基地や昭和基地での風車建設に取り組むことになりました。また、第 28 次隊から越冬が始まったあすか基地では、発電、建築、造排水、空調などの計画と施工に携わりました。さらに、ドームふじ基地の建設では、新型雪上車や橇をはじめ内部設備の準備も行いました。それら一連の設営活動の中で、新規に立ち上げ成功した事項もありましたが、多くの失敗も経験しました。

それらの失敗原因の多くが、気象状況、過去の事例などを充分考慮していなかったことに起因していました。そのような経験から学んだことは、失敗はしても、それを踏み台にして諦めずに次に繋げることが大事なことです。今回南極に行かれる第 57 次隊の皆様も準備万端だとは思いますが、もし失敗してもくじけず前に進んでいただきたいと思います。

今回の講演では、南極設営に関連して、輸送に関連した過去の行動を振り返ると共に、各国が現在取り組んでいる最新状況などを紹介し、輸送の大事さを説明したいと思います。



講師の石沢賢二氏

#### 2. アムンセン、スコットの南極点初到達から最新のトラクター輸送まで

1911 年（明治 44 年）から翌年にかけて争われた 2 人のリーダーによる南極点往復トラーバスは、アムンセンが圧倒的な速さで南極点到達を成し遂げ、スコット隊の全員が帰路に遭難しました。この成否を決めたのは輸送力でした。アムンセンは 116 匹の犬を持ち込み、途中不必要になったものは自分たちの食糧にしました。それに対し、スコット隊は、馬 19 頭と 3 台の動力橇（エンジン付きの小型雪上車）を導入しましたが、いずれも役に立ちませんでした。犬と馬を比較すれば、犬のエサは現地調達できるアザラシですが、馬は南極では手に入らないマグサしか食べません。また、馬は重く軟雪では足が潜るのはもとより、全身に汗をかいて体が冷えます。また、アムンセン隊に比べてスキーにも不慣れでした。勝負は最初から決まったようなものでした。スコット隊で特筆すべきは、動力橇を持ち込み、走行を試みたことです。結果的には失敗に終わりましたが、今日の雪上車やトラクタ

一による内陸輸送に先鞭をつけたのは偉かったと思います。

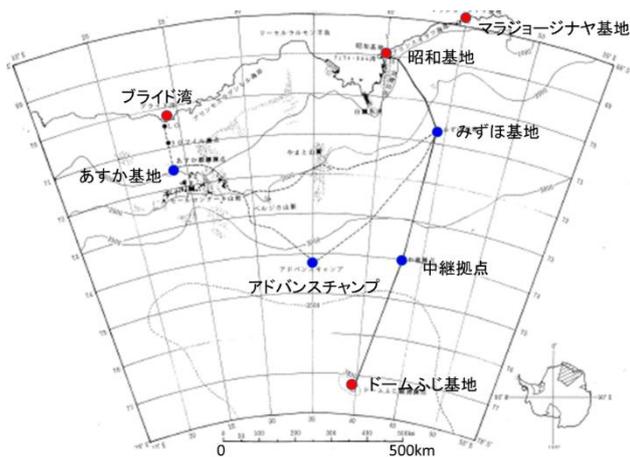


図1 沿岸各基地と内陸基地の位置関係

日本の第9次隊では、昭和基地から南極点までの往復約 5,500km の観測旅行を実施しました。このために KD 型雪上車を新たに開発しました。また、それまで使っていた 2 トン積み木製橇（自重 630kg）の他に、大型 4 トン積み鉄橇（自重 2.3t）を持ち込みました。しかし、長い 2 本のランナーが荷台と一体構造であったため、曲がるのが困難で、途中で放棄せざるを得ませんでした。雪上車には多額の開発費をつぎ込んで製作しましたが、橇は、まともな研究がなされないまま製作されました。大型橇の系統的な研究はその後も行われず、ドームふじ基地建設時にも頼りになったのは従来からの小型橇でした。

2000 年代になって米国はそれまで大型航空機にのみ依存していたアムンゼン・スコット南極点基地までの輸送に、大型トラクターと橇によるトラバース輸送を導入しました。現地試験では失敗を何度も繰り返し、超高分子量ポリエチレン製シートの上にブラダータンク（水枕状ゴム製燃料タンク）を載せてトラクターで牽引するという画期的な燃料輸送方法を確立しました。問題点を徹底的に抽出し改善する米国のやりかたを見習う必要があります。日本隊の今の雰囲気は、とにかく失敗は許されないというガチガチの状態に包まれている気がします。これでは新しいアイデアは湧いてきません。将来、内陸では、氷床深層掘削の再開や天文観測などが提案されています。これまでに行ってきた内陸輸送の大幅な見直しが必要でしょう。

### 3. 内陸への輸送拠点

これまで内陸基地への輸送は、昭和基地から行われてきました。しかし、リュツォ・ホルム湾定着氷の状況は近年厳しく、第 53 次および 54 次隊では、昭和基地から 20km 地点まで迫りながら 2 年連続して接岸を断念しました。そのため、昭和基地への燃料や大型物資の輸送に大きな支障を来しました。このような地理的環境にある昭和基地を内陸の輸送拠点にすることは、得策ではありません。昭和基地の周囲に目を転じると、300km 東にはロシアのマラジョージナヤ基地があります。ここは定着氷の厚さもそれほどでもなく、かつては内陸までのトラバースルートも確立されていました。また、西 600km には、すでに雪面下に埋没したあすか基地の近くにはベルギーが新たに建設したプリンセス・エリザベス基地があります。ロシア、ベルギーのいず

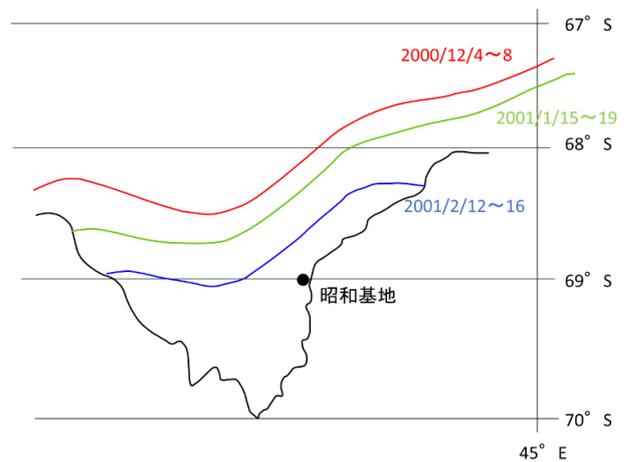


図2 リュツォ・ホルムの定着氷縁の推移

れの基地も砕氷船のアプローチは、昭和基地に比べて格段に容易です。ロシア基地からは内陸へは沿岸部の急斜面の登りが課題です。また、ベルギー基地からはセール・ロンダーネ山地の氷河の登坂が鍵を握ります。第 55 次隊では、マラジョージナヤ基地付近の調査を行いました。基地近傍で「しらせ」が暗岩に乗り上げ座礁し、大変な苦労をしました。いっぽう、ベルギー基地から山地を超えて大陸に向かうルートは、第 54 次隕石調査隊がベルギーの協力を得て、大型コンテナ橇を牽引して安全に走行しています。外国船を利用した大型トラクターの荷揚げや航空機による人員輸送などを考慮すると、ベルギー基地からのアプローチのほうが利点が多いように思います。

#### 4. 「しらせ」の運航

流氷と定着氷を含めた南極海氷が最小になるのは、2月から3月にかけての時期です。それにもかかわらず、「しらせ」は、まだ状況の良くない12月中旬にリュツォ・ホルム湾の定着氷に突入します。第51次隊から新「しらせ」の運航が始まりましたが、往路のラミング回数は、毎年1,500回以上を超え、第56次隊往路では、1次隊以来最高の3,187回に達しました。もう、「しらせ」の船体は相当なダメージを受けていると思われます。しかし、帰途となる2月には氷は緩み、それほどの苦労もなく氷海を脱出できるのです。なぜ、困難な時期に昭和基地を目指すのでしょうか？それは、夏作業に使用する建設資材や重機を一日でも早く持ち込むためです。もし、前年に材料が基地に持ち込んであるなら、ヘリコプターで人員だけ基地に運んでもらえば、到着したその日から作業が始められるのです。南極最大の基地である米国のマクマード基地に船が入るのは、例年1月の末から2月初旬です。氷の最も少なくなる時期に砕氷船に誘導されて大型コンテナ船や2万トン級のタンカーが入ってきて、来シーズンのための荷降ろしをします。日本もそのようシステムに切り替えるべきです。

リュツォ・ホルム湾定着氷への進入を遅らせることにより、以下のような「しらせ」のスケジュールを立てることができます。

- ① 12月中旬・・・リュツォ・ホルム湾定着氷縁着、人員および緊急物資の大型ヘリコプターによる輸送
- ② 12月下旬・・・セール・ロンダーネ地区で内陸用物資の荷降ろしと海洋観測
- ③ 1月初旬～中旬・・・リュツォ・ホルム湾への進入

④ 1月中旬・・・昭和基地接岸

⑤ 2月下旬・・・定着氷縁離脱

このような運航にすれば、ラミング回数を大幅に削減でき、「しらせ」船体へのダメージを軽減できます。また、内陸用物資を確実に揚陸でき、海洋観測の時間も増やせます。ただし、従来行われてきた「しらせ」乗組員による昭和基地での作業支援はほとんどできなくなります。これはしかたがありません。観測隊で夏作業員を増やすなどの対策が必要です。



会場の様子

第57次隊の皆さんには、とにかく現場を体験して下さい。そして、日本隊が歩んできた南極観測の概要を学んでいただき、帰国後には、将来に向けての新たな提案をして下さい。そのアイデアを検討・実行して悪いとわかった時には、それを踏み台にして改善すれば良いのです。輸送を始めとした南極のインフラを改善すれば、まだまだおもしろいことにアプローチできる可能性が増えると思います。

## 第56次越冬隊からのメッセージ

### 第57次日本南極地域観測隊

門倉 昭隊長、樋口和生副隊長

並びに隊員・同行者の皆様

### 南極OB会 國分 征会長

並びに会員・会友の皆様

本日、第57次日本南極地域観測隊の壮行会が開催されることを、お喜び申し上げます。57次の隊員・同行者の皆さまは、これまでの長い準備や訓練、本当にお疲れ様でした。これから始まる南極への旅路と生活・活動に向

けて、今は様々な期待や不安が入り交じった心境かと思いますが、今日の南極仲間との語らいや先輩方からの励ましの言葉が、南極への夢と期待をさらに膨らますことに繋がることと思っています。昭和基地にいる私たち26人も、皆さまの到着を今からとても楽しみにしています。至らないところも多くありますが、皆様が少しでも気持ちよく、次の夏の活動を進め、順調に越冬生活が始まるように、一生懸命、準備を進めていきたい

と考えています。また、別働隊の海鷹丸と中央ドロンイングモードランド調査隊の皆さまとは、直接お目にかかることはできませんが、すぐそばの同じ南極で、26人の仲間が応援していることもときどき思い出していただければと思います。現実の限られた時間と厳しい条件下では、肉体的にも精神的にも様々な

困難な場面に直面することもあるかと思いますが、そのような時でも、両隊の全員の力を結集して、明るく楽しく乗りきっていきたいと思っています。私たちは、皆様と一緒に、今シーズンも素晴らしい南極の夏を迎えられること、そして、しっかりと57次隊へバトンをお渡しできることを心より願っています。



気象・馬場隊員の長女・陽菜乃ちゃん誕生のお七夜のお祝いでの集合写真

白夜が近づく昭和基地より 2015 年 10 月 30 日  
第 56 次日本南極地域観測隊越冬隊長 三浦英樹ならびに越冬隊員一同

## 話 題 「南極教育ネットワーク」にご支援を！

柴田鉄治（7次、47次）

南極の素晴らしさを次世代の子どもたちに伝えたいと、教員派遣プロジェクトが発足して6年が経ち、軌道に乗った。毎年、2人ずつ南極体験教員が増えていき、全国の小・中・高校に散らばっていく姿を想像しただけでも、夢の膨らむ思いがする。

そこで、南極派遣教員を中心に「南極教育ネットワーク」をつくらせと、51次隊から57次隊までの派遣教員に呼びかけ、この派遣プロジェクトの提案者の一人である私が世話役をやりましょうと買って出た。

当面は、誰が発信しても全員に届くインターネットのネットワーク・チームをつかって、帰国後の活動報告など情報交換からスタートし、しだいに他校への「出張授業」の斡旋活動などへと広がっていきたい。

そして将来は、派遣教員たちのネットワークを核として、しっかりした組織をつくり、「南極少年団」を結成したり、中・高校生を南極に研修旅行に送り出したりすることを計画したいと考えている。

中・高生の南極派遣については、オースト

ラリアやニュージーランドでは、かなり前からやっているが、日本は南極の夏が冬休みの時季で、夏休みが利用できないことが難点になっている。その点、韓国は夏休みを利用して北極に高校生を派遣しているが、北極もいいが、私は南極にこだわりたいと思っている。

次世代に伝えたい南極の素晴らしいところは、二つある。一つは白夜、氷山、ペンギンといった大自然の素晴らしさで、その自然を科学的に観測することによって、地球環境の変化を知ることができること。「地球の病気はまず南極に現れる」という言葉があるように、南極は地球環境のモニターなのだ。

もう一つは、南極は国境もなければ軍事基地もない、人類の理想を実現した地球上で唯一の地だということである。宇宙を飛んだ宇宙飛行士は「宇宙からは国境線は見えない」というが、南極に行くと国境のない世界が当然のこのように見えてくるから不思議だ。

これからの世界は、各国が自国の国益ばかりを主張するようでは国際紛争もなくならな

いし、地球環境も守れない。人類みんなが、愛国心ではなく「愛地球心」をもたなくてはならない時代だろう。

そういう「国境を超えた視点」を持った人材を育てる最高の教材が南極なのである。私が南極に現職教員を送り込みたいと思いついたそもそものきっかけは、1986年のスペースシャトル「チャレンジャー号」の事故だった。宇宙に散った7人の宇宙飛行士の中に1人の女性教員がいた。「宇宙からの授業」をやるためにNASAが送り込んだのだ。

そのことが頭にこびりついたまま、47次隊に同行して40年ぶりに南極を訪れた私は、「そうだ。宇宙は無理でも、南極なら日本でもできる」と考えたのである。幸い47次隊長だった白石和行氏や51次隊長だった本吉洋一氏らの賛同を得て実現したのだ。

「南極を教育に！」——南極の素晴らしさを次世代に伝えるため「南極教育ネットワーク」に南極OBのみなさんからも絶大なご支援を賜りたい。

稚内市から



今年タロ・ジロをはじめとする樺太犬の南極出発60周年記念として、稚内市も協力し下さり、いろいろと事業を計画しております。写真は、地元紙「日刊宗谷」1月1日号の記事の抜粋です。

にかほ市から



秋田市会場（あきた文化発信センター・フォント AKITA 6F）での講演会の様子

市制10周年・白瀬南極探検隊記念館開館25周年記念事業「南極講演会・南極展」について先般の市制10周年、白瀬南極探検隊記念館開館25周年を記念して開催いたしました「南極講演会・南極展」につきましては賛同いただき誠にありがとうございました。お陰様で成功裏に終了しました。

# 南極関連情報

## 第 57 次南極地域観測隊長・副隊長決まる

2015 年 11 月 9 日（月）に開催された第 147 回南極地域観測統合推進本部総会において第 58 次南極地域観測隊長兼夏隊長として小山内 康人氏（28 次夏、31 次夏、39 次夏、49 次夏・観測隊副隊長）、副隊長兼越冬隊長として岡田雅樹氏（49 次冬、55 次夏）を決定した。

## 文部科学省主催 第 57 次南極観測隊壮行会

2014 年 11 月 9 日、明治記念館において南極地域観測統合推進本部主催の壮行会が挙行され、門倉昭観隊長兼夏隊長、樋口和生副隊長兼越冬隊長以下、夏期、越冬隊員 62 名、南極授業担当同行教員 2 名を含む夏隊同行者（しらせ乗船者等）12 名、夏隊同行者（海鷹丸乗船者）6 名、大鋸寿宣しらせ艦長以下約 180 名の乗組員および隊員および乗組員家族、並びに関係者多数が出席した。壮行会では観測隊長、しらせ艦長から出発に当たっての決意が述べられた。また文部科学大臣（代理）、防衛大臣（代理）から壮行の挨拶があり、来賓の国会議員等から激励の挨拶があった。



横須賀の街を望む出港式

「しらせ」は 11 月 16 日に横須賀を出港、観測隊は 2 日に出国し、豪州フリマントルで合流し、南極昭和基地に向う。

## 「しらせ」、今年は横須賀から出港

「しらせ」は、毎年晴海から出港するのが通常だったが、今年は燃料等を満載した状態では出港日の水深が出港に適さないため、母港の横須賀から出港した。

## 昭和基地に第一便

2015 年 12 月 23 日 12 時 58 分（昭和基地時間）（日本時間 18 時 58 分）、南緯 69 度 01.2 分、東経 39 度 07.2 分（昭和基地西方約 10 マイル）の定着氷に停留中の「しらせ」より、門倉昭第 57 次観測隊長ならびに大鋸寿宣艦長が乗ったヘリコプターの第一便が発艦し、同 13 時 05 分、第 56 次越冬隊（三浦英樹越冬隊長ほか 25 名）の待つ昭和基地に到着した。

## 「しらせ」3 年連続の昭和基地接岸

「しらせ」が、2016 年 1 月 4 日（月）現地時間 1 時 45 分（日本時間 7 時 45 分）、昭和基地の沖合約 500m の定着氷に到着し、昭和基地接岸を果たした。

昭和基地のある南極リュツォ・ホルム湾は、近年厳しい海水状況にある中、昨年、一昨年と続けて接岸を果たしました。今シーズンは、往路ラミング回数 931 回、10 日間で多年氷帯を突破し、現「しらせ」で初となる 3 年連続の昭和基地接岸となった。

（「第一便」、「接岸」の両記事は、国立極地研究所ホームページより。）

## 連載 支部便り②⑥（青森支部）

### 青森支部会設立総会の報告

2015 年 4 月に秋田県にかほ市で開催された第 18 回「南極の歴史」講話会の開催時、OB 会事務局や秋田支部の方々のはからいにより、青森県在住の OB が 3 名参加したことで、県内 OB 同士の初めての顔合わせが実現

しました。青森在住者が 10 名程度と他県に比べて少ないこともあり、秋田支部の協力も得ながら、青森支部を設立することとなったことは、会報 25 号で報じられた通りです。

青森支部の会員はおもに青森市、弘前市、

八戸市、むつ市など、およそ 50 キロから 150 キロも離れた地域に在住しておりますので、設立総会の開催地には迷いましたが、今回は八戸市で 9 月 22 日（祝）17 時より、八戸中心街の飲食店（眞味）にて開催いたしました。

参加者は青森支部会員では、松原和正（21,33 次越冬）さん、佐々木利さん（45,51 次越冬）、私と 3 名となりましたが、秋田支部会より二部恒美さん（51 次越冬）、埼玉から OB 会副会長で運営委員長の神田啓史（19,24,29,37,45 次）さんも駆けつけてくださいました。また、57 次の県内関係者の壮行として、かつて南極行動を共にした海上自衛隊の知人や 57 次隊の青森県出身者にも案内した結果、青森在住の海上自衛官 5 名も集まり、合計 9 名となりました。



参加者の自己紹介の様子

総会では、私から設立経緯、会員構成などの説明、OB 会神田副会長の挨拶のあと、松原和正さんの乾杯のご発声により、早々に南極での思い出や八戸の海の幸を肴に、地酒を堪能することとなりました。懇談中は参加者同士の自己紹介のほか、41, 42 次に次ぎ 57 次でしらせに勤務する海自の高橋靖悦氏（当日も参加）、57 次隊の渡貫淳子隊員（調理、越冬）、渡邊創隊員（通信、越冬）（当日、両隊員は欠席）、ほか南極経験のある自衛官 1 名が八戸市の出身であることから、彼らが計画



ほろ酔い？で記念撮影

中の「南極八戸せんべい汁会」について、青森支部としてサポートするという事で合意にいたりました。具体的には 57 次隊員、57 次しらせ乗員、極地研広報室、八戸せんべい汁研究所、県内の新聞社との連絡役を私が行うこととしました。しらせ出港直前に南部せんべいを寄贈したほか、57 次隊員の両名と県内で直接会って、極地研経由での情報提供をお願いしました。県内の新聞 2 社へ「南極八戸せんべい汁」計画を伝えたところ、想像以上の好反応で開催前から新聞記事（2015 年 12 月 14 日東奥日報夕刊）となったほどです。全般的に青森県民の南極観測とのつながりは多くないことから、「南極八戸せんべい汁」をきっかけに、南極観測事業に関する理解の向上になることを願っています。

少ない人数でのスタートとはなりましたが、次回は多くの支部会員が参加できるよう、青森市などで行うことを予定しております。また、今後も秋田支部はじめ青森県にゆかりのある OB の方々にも、講演などご協力いただくこともあるかもしれません。その時はどうぞよろしくお願ひします。

鮎川恵理（42 次夏オブ、青森支部幹事）

## 支部便り⑳ （茨城支部）

### 茨城支部 2015 年の活動報告

#### ○はじめに

茨城支部では、7 月 21 日から 8 月 2 日にかけて開催された「つくばサイエンスツアー 科学体験フェスティバル in つくばクレオスクエア」（以下、クレオイベント）に参加し、パネルの展示とトークショーを行いました。また、9 月 21 日にはつくばエキスポセンター



クレオイベント（トークショー）

と共催で第 29 回ミーツ・ザ・サイエンス「南極の今！つくばに戻った隊員たち語る」(以下、エキスポイベント)を実施しました。

### ○クレオイベントについて

クレオイベントは一般財団法人茨城県科学技術振興財団つくばサイエンスツアーオフィス(以下、ツアーオフィス)の10周年記念イベントとして企画されました。今回のイベントでOB会が協力することになった経緯は、ツアーオフィスの担当者がたまたま去年のつくばエキスポセンターでの“ミーツ・ザ・サイエンス”を見たおりに「暑い夏に涼しい企画として、科学にあふれた楽しい催し」と感じたことがきっかけとなり、茨城支部へ依頼したとのことです。トークショーは、中島英彰さん(第31次越冬、第48次越冬)と中山由美さん(第45次越冬、第51次夏)により行われました。お二方の阿吽の呼吸の掛け合いによるアドリブ盛りだくさんの楽しい話題と時には来場者に問いかけを交えた気さくなやり取りにより、初めはまばらだった会場も通りすがり人の足を引き留めさせることでほぼ満席となりました。また、トークショー終了後にも熱心に質問をする来場者も多数見受けられました。

### ○エキスポイベントについて

本年も直近に帰国された隊員の帰国報告会として、エキスポセンターにて講演会と簡易中継を実施しました。講演会では塚本健二さん(第55次越冬)が「南極観測隊の活動と南極のふしぎ」、武田真憲さん(第56次夏同行者)が「世界最高の大気観測！一空から南極大陸を見てみよう」の題目で講演しました。塚本さんの講演では、現地で収録してきた実験動画(凍るカップラーメン、割れないシャボン玉、髪の毛を凝らせて変身など)、武田さんの講演では無人航空機による高高度のビデオ映像が特に印象的でした。簡易中継は、現在昭和基地で越冬中の松下隼士さんと押木徳明さんによるバーチャルツアー(生中継による基地内の紹介)と会場との質疑応答が行われました。バーチャルツアーでは従来の中継

では大変手間のかかる移動しながらの基地内の撮影もスムーズに行うことができ、今までとは一味違った中継となりました。中継後には次期隊員の紹介、南極氷の配布やOB会員との個別の質疑応答が行われ、短い中継時間に質問できなかった来場者へのフォローも行うことができました。本年も来場者が80名を越える盛大なイベントとなりました。



エキスポイベント(中継)

### ○おわりに

ここでは紹介しきれませんでしたでしたが、この他にも日立地区では小中学校に対する出前講座やひたちなか市科学の祭典、日立市科学の祭典など、活発な活動が行われています。また、10月22日にはつくばオーロラ会(つくば地区壮行会)が行われる予定です。

クレオイベント、エキスポイベントともに極地研究所広報室には、南極氷やパンフレットの提供等多大な支援を頂きました。また、クレオイベントではつくばエキスポセンターよりパネルを借用させて頂きました。ここに厚くお礼を申し上げます。11月15日(土)に第56次隊参加の水谷剛生さん(設営一般、夏隊)の支部主催壮行会を8名の参加で行いました。初対面の人もいましたが、しらせ船内での生活、夏の雪上での注意事項、そして昭和での夏作業について等、壮行会は引継の場にもなっています。話が弾んでアツという間に3時間が経過しました(店の計らいで2時間の飲み放題を1時間延長してもらいました)。

(茨城支部幹事長 島村哲也)

## 支部便り②⑧ (信州支部)

### 第 57 次隊壮行会を開催

11月21日(土)に第57次隊参加の水谷剛生さん(野外観測支援・越冬隊)、赤田幸久さん(野外観測支援・トロール隊)の支部主催壮行会を行いました。水谷さんは昨年の夏隊に続いての参加、赤田さんは4回目ということで、57次全体の観測概要について伺う機会になりました。久々に参加した藤森さん(42次)からは、2代目しらせについていくつか質問があり、知っているようで知らないことを知ることができました。

信州支部の現在のメンバーは30数名程ですが、歴史は古く17次から参加しています。以前は観測関係の参加者が多数でしたが、45次以降は設営関係の参加者が増えて、57次まで毎年参加者がいます。南極観測隊については、訓練を古くから長野県内で行って来た経過があり、地元のメディアもその模様を取り上げてくれています。そのため南極観測に関心を持った人が大勢いるようで、参加者のほ



中央が水谷さん、その右が赤田さんです。

とんどが地元での講演を経験しています。

信州支部で行う行事は総会(実は飲み会)をはじめ夏に「青少年のための科学の祭典」に参加しています。次年度は参加者の帰国に合わせて支部向け報告会の開催を予定しています。大きな会場での講演会も必要ですが、支部の皆さんがそれぞれに講演するミニ集会も意味ある広報になっています。



## 連載「帰国後の各隊の動き」(隊次順に掲載)

### 九次隊報告—茶色の杖を手にして—

私の手元には茶色に輝く杖がある。この杖は故村山隊長が愛用した杖である。その後、「歩行難」になった柿沼氏、そして私へと託されたものだ。

おりしも、「南極観測再開50周年記念行事」の一環として、名古屋港に展示中の砕氷艦“ふじ”で講演会および見学会を開催、合わせて9次隊が参集する旨の連絡があった。丁度良い機会なので、この杖を持って参加することとした。

名古屋へは隊員6名と45次隊の阿保氏が参加。その日の夕食会を兼ねた懇親会は、いまだから話せる極点旅行中に発生した大事故、その怪我人の運搬、後の治療やリハビリの詳細など、また、クレバスに落ちそうになった隊員の救助の様子など、当時を偲んで話は盛



9次隊参加者の皆さん

り上がり、楽しいひと時だった。

翌18日、講演会の日は、快晴、48年ぶりに“ふじ”との再会。杖についての乗船は難しく、阿保氏の介助を得て車椅子で乗船。

ヘリ格納庫内(越冬隊員用品等を展示)の見学、ヘリ離着陸用甲板の散歩等で、当時の

暴風圏での艦の大揺れを回想した。杖を持って艦長室や隊長室、隊員室見学を考えたが、車椅子では無理なので自重した。

わが隊の遠藤氏の講演「村山隊長と極点旅行」が始まる定刻前には、國分南極 OB 会会長初め南極の OB や一般入場者で会場は満席。

盛り上がったお三方の講演を堪能し南極観測の益々の発展を願いつつ、杖を頼りに会場を後にした。

(9 次 吉田光雄)

## 第 24 次隊同窓会 in 名古屋

第 24 次観測隊の同窓会が 9 月 26 日(土)、名古屋で開催された。参加者は 25 名(同伴の夫人 1 名を含む)であった。今回の企画は盛り沢山で名古屋港の「ふじ」見学、ポートビルでの記念講演会、そして近隣のホテル邦和セミナープラザでの懇親会であった。



前晋爾隊長と瑞宝中授章を手にする隊員

名古屋で開催されたのは二つの理由がある。これまでの会場が東日本に偏っていたため、今回は関西方面を考えていたことと、8 月～10 月まで名古屋港に「ふじ」が係留されてから 30 年を祝う「ふじ」30 周年記念事業(24 次越冬隊の岩坂泰信氏が事業委員長)、および南極 OB 会主催の南極再開 50 周年記念事業に参加することで、名古屋に決定した。第 24 次越冬隊の帰路は「ふじ」の最終の航海でもあったので名古屋港の「ふじ」には特別な愛着があった。ポートビルでは岩坂泰信氏自らが演じる南極マジックに続いて、南極トークとして大久保栄治氏(24 次越冬、医療)による『第 24 次南極観測隊秘話—今だから話せるある冒険』と題する講演があった。雪上車と航空機の支援の下で、みずほ基地から昭

和基地まで 300km を 1 台の橇を曳きながら単独歩行した医学実験の物語である。観測項目には上がっていなかったものであるが、医学的な見地からは現場の前晋爾越冬隊長のお墨付きがあった。残念ながらみずほ基地での雪上車故障により一時中断を余儀なくされたが無事昭和基地まで歩ききった。講演は当時の写真をふんだんに使った迫力あるものであった。

6 時からホテルに移動して、懇親会が始まった。今回の同窓会のトピックスは前隊長が春の叙勲で、瑞宝中授章を受けたことである。24 次隊の功績とばかりに勲章が隊員の手で撫ぜ回されながらも隊長はご満悦であった。隊員からも隊長へのお祝いに、24 次隊の刻印の入った腕時計の目録を進呈した。さらに、今回の「ふじ」の記念すべき事業に、できたてほやほやの「オングル新報(24 時新聞社)」復刻版、大久保氏の私家版「別世界、南極で



第 24 次観測隊全員集合

の 1 年間」、第 24 次隊アルバム「自然と人間」が「ふじ」(名古屋みなと振興財団)に寄贈され、その贈呈式も開催され、会は大いに盛り上がった。参加できなかった隊員のビデオレターを含む、近況報告が続き、隊員の中には

32年ぶりに再会した仲間もいた。二次会では、昔懐かしい思い出話、ハーモニカまで飛び出し、深夜まで延々と会は続いた。翌日は名古屋

屋城の見学を楽しみ解散した。

(24次 神田啓史)

## 27次会「出航30周年記念会」を開催

11月14日から15日にかけて、出航30周年記念の27次会を野沢温泉で16名の参加で開催しました。今回の狙いは、いつもの温泉と今年開業の北陸新幹線に乗ることでした。当初計画した戸倉上山田から野沢温泉に場所が変更になりましたが、上田でなく飯山まで新幹線で行ったことで、この目的も達成することができました。聞くところによると、北陸新幹線は今年のヒット商品のトップになったそうです。車での参加者を除いて、東京または金沢から新幹線の旅を満喫しました。

毎回のことですが、宿に着いた人から順次温泉に入り、ビールを飲みながら近況報告会が始まります。11月14日は、晴海出航から丁度30年目にあたる日であったため、当日昼食に赤飯の弁当を食べたことや東京湾を出て暫くすると揺れがあり、大勢が船酔いになったことなどが話されていました。

予定通り18時には全員が揃って「出航30周年」の横断幕が掲げられた部屋で宴会が始まりました。恒例の一人一言は、当時のオングル島にあった高校の校長先生にはじまり、それぞれから近況も含めて多彩な話題提供がありました。越冬中に行っていた毎月の誕生日会を思い出す大変楽しい、そして内容のある(学術的?)ものでした。会場を移した2次会では、現在の観測隊の構成や観測テーマ、そして新しらせのことなど豊富な話題で大い



27次参加者の皆さん

に盛り上がりました。予定の23時に一旦閉会宣言がありましたが、話題は翌日まで尽きませんでした。

あれから30年、誰もが同じように年を重ねました。今回参加した中には、一番若かった長田さんと年長の吉田隊長のお二人がいますが、やはり同じようにあれから30年の年月を過ごしました。写真を見るとやはり皆さんそれぞれに年を重ねたことが分かります。

今回の野沢温泉はスキーで行ったことのある人が何人かいましたが、建物も趣があり、いかにも温泉街という雰囲気でも風情がありました。もちろん温泉もお勧めです。次回は家族で来たいという参加者が何人もいました。次回越冬30周年は、熱海以西開催が決まりました。熱海は解散会を開いた場所ですが、時期はもう少し早い時期を予定しています。

(27次 荻無里 立人)

## 38次観測隊 しらせ研修会

38次隊は、平成27年9月26、27日に千葉県船橋市の船橋港に係留された「しらせ(5002)」で、しらせ研修会を開催しました。

私たちは、帰国後5年ごとに隊全体での同窓

会を開催しており、平成15年8月の5周年(於：山梨県勝沼「ぶどうの丘」)、平成20年8月の10周年(於：長野県富士見「板橋区青少年センター」)、平成25年8月の15周年(於：北

海道小樽の「青塚食堂」（食堂兼民宿）と続いてきた中で、今回は不定期な開催ではありますが、平成 27 年 4 月の山内隊長・山岸夏隊長退官祝いに続く、5 回目の同窓会を開催しました。なお 38 次隊では、毎年 9 月に東京都多摩地区あきる野（秋川溪谷）での懇親バーベキューも、帰国後の恒例行事として行っています。

今回は、退役した「しらせ（5002）」に宿泊して懇親を深めることができるという情報を入手したことから、東京近隣の隊員（江崎・木津・芹沢）が幹事となり、研修会の日程調整、しらせ利用の予約、懇親会場（さっぽろ千葉ビール園）の手配、二次会や朝食等の買出し等を行いました。参加者は、計 15 名（北海道から愛媛県まで）でしたが、盛況に催すことができました。

研修会では、隊員公室に隊員が集合後、船内掃除及び左舷甲板塗装後の養生テープやビニールシートの撤去作業のボランティアを行いました。

作業後は懐かしの艦内見学です。参加者それぞれは感慨深く、そして船内深く見学して回りました。その後、懇親会までは隊員公室で山内隊長・山岸夏隊長の退官記念講演と金尾隊員（極地研）による最近の観測隊情勢の講演を聞きました。懇親会場のさっぽろ千葉ビール園は



38 次隊参加者の皆さん

移動も楽な「しらせ（5002）」の真向かいにあります。懇親会ではジンギスカンを酒の肴にして、お互いの近況を語り合い、大いに盛り上がりました。二次会では、平沢隊員（極地研）による講演「56 次夏隊の大気観測の報告」を聞きました。準備したお酒は順調に消費されるとともにそばも茹でられるなどして、皆のおなかにしっかり納まりました。

しらせ研修会はあっという間に終わりました。次回は 20 周年（平成 30 年）、どこで開催されるか、今から楽しみです。

（38 次 江崎雄治）

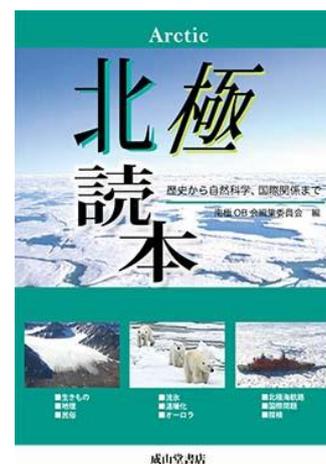


## 新刊紹介

北極読本 - 歴史から自然科学、国際関係まで  
南極 OB 会編集委員会 編  
(成山堂書店 2015 年 10 月発行 220 頁 本体 3000 円+税)

これまで北極域での観測や研究は、国家事業である南極事業と異なり、各研究コミュニティが個別に断続的に行ってきた。地球温暖化の影響が明らかになるにつれ、全球的な気候システムに影響をもたらす北極域の環境変化への懸念や北極海の海水の減少に伴う北極航路の活用や天然資源の利用などの経済面からの関心の高まりをうけ、文部科学省は、北極域における組織的かつ継続的な観測・研究体制の整備と北極研究の一層の推進を図り、北極研究の強化に向けた検討を行った。そして、2011 年から 5 カ年計画の「グリーン・ネットワーク・オブ・エクセレンス北極気候変

動研究事業」が始まり、分野横断的かつ統合的な研究が行われた。このプロジェクトは自然科学系の研究課題が中心であったが、2015 年からは、北極域に関する諸課題に対して人文社会系の研究を含めたアプローチを提示することをも目的にした「北極域研究推進事業（ArCS プロジェクト）」が後継プロジェクトとして開始された（詳しくは本書のコラム 7 に解説されてい



る)。

本書が刊行されたのは、このような日本の北極研究の発展期にあたる。本書は、北極域の気象、地理、自然環境、生物圏や北極探検史、民族史などを全 14 章で解説した読本である。地球温暖化が及ぼす環境変動などの現在進行中の最先端な研究内容は抑制的に記述され、各分野の基礎的な知見がバランスよく丁寧に解説されている。その一方、16 章のコ

ラムでは、中谷宇吉郎博士の北極観測や北極域の地政学の解説など、多様な分野のトピックがマニャックかつ魅力的に記述されている。分野横断的な研究を進めていく上で必要な基礎知識やテクニカルタームの共有、これから北極研究に取り組む若手研究者のためのテキストとして、推薦したい一冊である。

(北海道大学低温科学研究所 的場澄人)

\* 「北極読本」の購入を希望される方は、南極 OB 会事務局に連絡ください。 \*

ヒマラヤにホテルを三つ ―ネパールの開発ヴィジョンを語る―

宮原 巍著

(中央公論新社 2015 年 6 月発行 248 頁 本体 1600 円+税)

この度宮原さんが「ヒマラヤの灯」、「還暦のエベレスト」に続く 3 冊目の本を刊行しました。

私にとって、宮原さんとの出会いは、非常に強力なインパクトがありました。それは、今から約 40 年前、神田駿河台下で、紹介者は平山先生(第 1 次、2 次、3 次南極観測隊員)でした。

最初出会った時の印象ですが、背は低く、色白で、この人が第 4 次南極観測隊員で、日大山岳部初のヒマラヤ遠征(ムクト・ヒマール)隊員で、日大初のグリーンランド遠征隊の隊長を務め、その後ネパールに渡り、エベレストの麓で、世界一高い場所(3,900m)にホテル「ホテル・エベレスト・ビュー」を建設し、今も運営に携わっている伝説の人とはとても想像できませんでした。

しかし大変気さくな人で、すぐ近くの居酒屋いわゆる赤ちょうちんに入り、豊富な知識と非常に強い信念の下、ネパールについて熱き思いを強く語って頂きました。

それ以来の付き合いで、私がヒマラヤ遠征した時は、カトマンズで大変お世話になり、最近ではネパールで選挙に立候補した時は、微力でしたが、日本で支援させて頂きました。

この本ですが、前半はネパール国との関わりあいから、一つ目のホテル「エベレスト・ビュー」、二つ目のホテル「カトマンズ・ビュー」建設の経緯が書かれており、後半はネパール国への経済、政治について、そして執念の三つ目のホテル「アンナプルナ・ビュー」について書かれています。

宮原さんは大自然に恵まれ、素朴で人情味ある人々に心を打たれこの地に住みたいと思い、ネパールに渡りました。

そして「ネパールは観光だ」という強い信念のもと、ネパールの観光産業に貢献すべく「ホテル・エベレスト・ビュー」を建設し、運営しております。

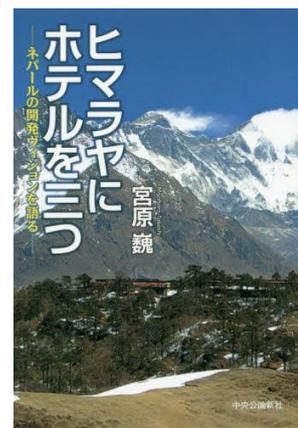
次に建設したのが「ホテル・カトマンズ・ビュー」です。ネパールにおいては、今までの日本の事業は全て政府援助でしたが、このホテルに関してはネパールにおける日本人初の民間投資事業であると自負しています。

いつの日か、世界でもまれなる景勝地ポカラにホテルをという夢を実現しました。3 つ目のホテル「ホテル・アンナプルナ・ビュー」です。このホテルはポカラの美しい湖フェワ湖(アンナプルナの氷河が水源)より見上げる、サランコット山(1,590m)の頂上付近に 2012 年に着工しました。

東にマナスル、西にダウラギリ、中央にアンナプルナ巨峰郡とマチャプチャレの尖塔を配す 100km にも及ぶ大展望です。

現在躯体工事が完了し、仕上げ工事の施工中で、完成の暁にはきっと世界有数の展望台になる事は確実です。

本の最終章では国際援助について述べていて、被援助国ネパールについて多くの苦言を呈しています。それでも、何時も宮原さんは



言っています「ネパールは限りない可能性を秘めた国だ」。やはり宮原さんはネパールが好きなのです。

門外漢で国際開発の専門家でないと言いながら、彼一流の言葉でネパールの国情を述

べ、非常に解り易く、この本を読むとネパールの政治、経済が全て解ります。

皆さんに是非一読を薦めたい本である。

(白壁 弘保)



## おめでとうございます：叙勲、受賞

白根 一 氏 (14 次冬) 平成 25 年度旭日双光章

酒井重典 氏 (10 次冬、16 次冬) 平成 27 年度瑞宝小綬章

鈴木剛彦 氏 (10 次冬、15 次冬) 平成 27 年度瑞宝小綬章

福井徹郎 氏 (12 次冬) 平成 27 年度瑞宝小綬章

川村賢二 氏 (57 次夏) 日本気象学会 2015 年度堀内賞受賞、

研究業績：極氷床コア及びフィルン空気を基にした過去の大気組成・気候の復元と変動メカニズムの研究

山岸久雄 氏 (19 次冬、26 次冬、36 次夏、38 次夏、45 次冬、53 次夏)

地球電磁気・地球惑星圏学会 フロンティア賞受賞

推薦理由：極地における電波・磁場観測技術の開発と基盤整備による磁気圏・電離圏研究への貢献

訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

(敬称略)

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
川野栄一	1,2,3	宗谷	H26.7	90	土屋貴俊	4w,7s,9w	機械	H27.10	89
竹内忠良	1,2,3	宗谷	H26.10	84	渡邊清規	3,4,5,6	宗谷	H27.10	92
小野田 昇	1,2,3	宗谷	H27.4	85	川村昭三	5s	機械	H27.11	87

## 南極 OB 会アーカイブ事業報告

南極 OB 会は元観測隊員等が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。資料の受け入れについては南極 OB 会事務局にお気軽にご相談ください。

### \*\*\* 広報委員会からのお知らせ \*\*\*

#### ○通信費納入のお願い

今年度最後の会報を皆さまにお届けします。まだの方は通信費の納入をお願いします。

#### ○南極観測再開 50 周年記念事業

事業を進める上での寄付金をお願いしています。1 口 3,000 円で、3 月 31 日〆切です。

\*\*\*\*\*

南極 OB 会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

メール : [nankyoku-ob@mbp.nifty.com](mailto:nankyoku-ob@mbp.nifty.com)

郵便振込：加入者名 南極 OB 会 00110-1-428672

南極 OB 会ホームページ : <http://www.jare.org/>

\*\*\*\*\*